

No.3堆肥の活用と施肥方法の改善による麦類の品質・収量の向上

- 活動期間 令和5年度～令和7年度
- 対象者名 涌谷町麦類生産者 14経営体
- 課題の背景
 - ・涌谷町では、14経営体が146ha(令和5年産)の麦作に取り組んでいる麦産地であるが、近年、周辺町域に比べ低収の年が出てきている。
 - ・令和5年度に町内に堆肥ストックヤードが2か所建設され、土づくりに堆肥を利用しやすい環境となったが、麦大豆作付け体系のなかでは散布適期が短いため、無理なく麦作に活用できる散布方法が求められている。
 - ・「夏黄金」に「シラネコムギ」の一括追肥方法を準用しているが、遅れ穂の発生が多いなど、登熟期に肥料を多く必要とする「夏黄金」に適していない可能性がある。

令和6年度

目 標	活動事項	普及活動のポイント
<p>◆土づくりの重要性に対する理解が進み、町内産堆肥の有効活用が図られる。</p>  <p>(左)堆肥散布作業の様子 (右)堆肥散布直後のほ場</p>	<p>◆堆肥の有効活用支援</p> <ul style="list-style-type: none"> ・堆肥散布試験 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 麦生育中の3月に堆肥を施用する試験を行った。散布1年目(各2t/10a施用)の2ほ場では堆肥の効果に差があったが、2年連用(R5年は800kg/10a、R6年は1t/10a)したほ場では堆肥区の収量が約30%高く、特に4月以降の肥効に差があったと思われる。 ■ 堆肥散布ほ場の地力増進の効果については判然としなかったが、散布ほはpHがやや高く、石灰・苦土が対照ほに比べ収穫後も維持されている傾向があった。 ■ 町内産堆肥の適切な麦作での散布量を算出し、講習会を通じて伝達した。子実用トウモロコシに堆肥施用し、後作で麦作を行うなど、少なくとも5生産者が各々の輪作体系の中で麦作に堆肥活用を行っている。
<p>◆効果的な施肥方法に対する理解が進み、取組者が増加する。</p>  <p>現地検討会</p>	<p>◆麦類の品質・収量の向上支援</p> <ul style="list-style-type: none"> ・葉面散布試験 ・圃場巡回、栽培指導 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 従来の減分期一括追肥(減分期硫酸N10kg/10a)にかえて減分期硫酸-穂揃期尿素葉面散布の追肥体系を試験した。 <ul style="list-style-type: none"> ①減分期N3kg-穂揃期N5kg②減分期N5kg-穂揃期N7kgの2パターンを行い、対照区に比べどちらも品質・収量が優れ、穂揃期主体の追肥とすることで遅れ穂の発生量減にもつながる可能性が示された。収量は特に②の区が優れた。 一方で、葉面散布作業の適期の短さや作業が田植時期と重なる点は、普及における課題である。 ■ 町内ほ場での生育状況と遅れ穂発生量の調査から、遅れ穂は幼穂形成期(最高莖数)の莖数が少ない場合に多く、また遅れ穂が多い場合には特に容積重(歩留り)への影響が大きく、品質低下の要因となることがわかった。

意図する対象の変化(最終年度)

- ・土づくりの重要性に対する理解が進み、町内産堆肥の有効活用が図られる。
- ・効果的な施肥方法に対する理解が進み、取組者が増加する。

数値目標：堆肥散布実施者数
 令和4年度 0経営体→5年度 1経営体(実績3)→6年度 3経営体→7年度 6経営体